

<p>文学・哲学・言語</p>	<p>【代表的な研究テーマ】</p> <p>□ 実践的英語音声指導力の向上をはかる英語教員養成</p> <p>□ 身につく、実のある英語の音声・発音指導の研究</p>
<p>key word</p>	<p>課題解決に役立つシーズの説明</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 英語の音声・発音指導</li> <li>■ 英語教師の基礎体力</li> <li>■ 実践的英語指導力</li> <li>■ 初中等英語教員養成</li> </ul>	<p>【1】実践的英語音声指導力を伸ばすことができる英語教員の養成に向けて</p> <p>平成元年告示の学習指導要領外国語編(英語)で、「コミュニケーション能力の養成」を柱とする英語の実践的なコミュニケーション能力の習得が盛り込まれ、以来、過去二度の学習指導要領の改訂(中学校(平成10年、20年)、高等学校(平成11年、20年)を経て、現在、英語によるコミュニケーション能力の養成は学校教育の国民的課題となった。平成20年の小学校学習指導要領の改訂では外国語活動(英語)が5、6年生で新たに登場し、平成23年4月から、小・中・高の初中等教育のすべての校種での英語教育が行われている。そして、中学校の英語の時間は30年ぶりに週4時間に増え、高等学校では「授業は英語で行うこととする」ことが学習指導要領に明記された。こうした状況はさらに加速し、次期学習指導要領では、小学校3、4年生からの週1回、小学校5、6年生では週2回の英語教育が始まる。その中で、今日、英語教育の最重要課題として掲げられているのが、「音声によるコミュニケーション能力の育成」に重点をおいた初中等段階での英語教育の展開である。</p> <p>これらの現在の英語教育への要請と期待を踏まえ、「音声によるコミュニケーション能力の育成」の実現をはかるにあたっては、その実現の根幹となる英語教員の「英語の音声指導力の向上」という課題に教員養成段階から取り組み、「実践的英語音声指導力の質的水準の向上」をはかる初中等英語教員養成カリキュラムを開発し、運用、評価を進めることが、英語教員の基礎体力としての「英語音声指導力の向上」をはかり、さらに、そこから音声によるコミュニケーション能力の基礎である、児童・生徒の「英語の発音力」の向上の実現をはかることにつながる。</p> <p>研究では、(1)教員養成段階での将来の英語教員となる学生の英語の発音力の向上をはかる学部教育プログラム、(2)実習授業での学生の実践的音声指導力の育成をはかる実習プログラム、(3)小・中・高の教育実践の場での英語教員の実践的音声指導力と児童・生徒の発音力を伸ばす指導力強化・音声教育プログラムを開発・運用し、学生・教員自身の発音力の向上と学生・教員の指導を受けた実習校・協力校の児童・生徒の発音力の向上を音声学的に評価し、指導学生・教員の英語の発音力、実践的指導力の向上を評価し、成果の教育臨床的な応用をすすめている。</p>
	
<p>大嶋 秀樹 Hideki Oshima</p>	
<p>教育学部 教授</p>	
<p>【プロフィール】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●専門分野: ・英語科教育学 ・神経言語学 (fMRIによる脳内での言語処理の研究)</li> <li>●博士(国際文化)東北大学</li> <li>●1982年 同志社大学文学部 英文学科 卒業</li> <li>●1992年 鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 教科・領域教育専攻 言語系コース(英語) 修士課程 修了</li> <li>●2009年 東北大学大学院 国際文化研究科 国際文化交流論専攻 言語コミュニケーション論 講座博士後期課程 修了</li> <li>●1982年~2001年 香川県公立中学校、 高等学校 教諭(英語)</li> <li>●2001年 国立高知工業高等 専門学校 准教授</li> <li>●2010年 滋賀大学 教育学部 准教授</li> <li>●2013年 同 教授</li> <li>●2018年 東北大学加齢学研究所 共同研究員(脳機能解析)</li> </ul>	<p>【2】何を目標に、どうやって、英語の音声・発音指導を進めるのか</p> <p>現在、英語は国際語と呼ばれ、様々な種類の英語がコミュニケーションの場で使われている。英語には、イギリス、アメリカの英語のほか、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アジア、アフリカ、ヨーロッパで、それぞれに特徴を持った英語が存在する。語彙、文法、音声・発音、綴りなど、それぞれで違いがあり、各地域内で話される英語にも数多くのバリエーション(変種)が存在する。中でも、音声・発音の違いには、各地域間・地域内で多くの変種があり、しばしば、音声・発音の違いが、英語によるコミュニケーション上の不便や誤解を生む。</p> <p>日本の初中等の英語教育では、1947年発表の学習指導要領試案以来、長らくアメリカ或いはイギリスの標準的な英語・発音が、学習指導上の目標とされてきた。その一方で、教育現場での英語の音声・発音の指導は、教材や英語教員の発音を「聞いて、真似」ることが中心で、結果として学習者が身につける英語の音声・発音は、アメリカ或いはイギリスの標準的な英語・発音ではなく、日本語の母音・子音をそのまま持ち込んだ日本語訛りの英語(日本人英語発音)で、しばしば、音声・発音が通じなかったり、聞き取れなかったりして、英語の音声・発音の習得は、学習が進むにつれて、学習者にとって期待がしぼむ結果を生み出してきた。</p> <p>研究では、「聞いて、真似」でも、いつまでたっても身につかない、英語の音声・発音指導ではなく、児童・生徒の過度の負担にならない体系的で、身につく、実のある英語の音声・発音指導を取入れた英語の授業開発を目指している。</p> <p>&lt;主要業績&gt;</p> <p>fMRI Study of Japanese Phrasal Segmentation (Hituzi Linguistics in English, 18) (単著)(ひつじ書房)の刊行(2013年)</p>
<p>【主な社会的活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●関西英語教育学会理事、全国英語教育学会・大学英語教育学会論文査読委員</li> </ul>	<p>企業・自治体へのメッセージ</p> <p>・英語教育(小・中・高)に関する共同研究・委託研究が可能です。</p>